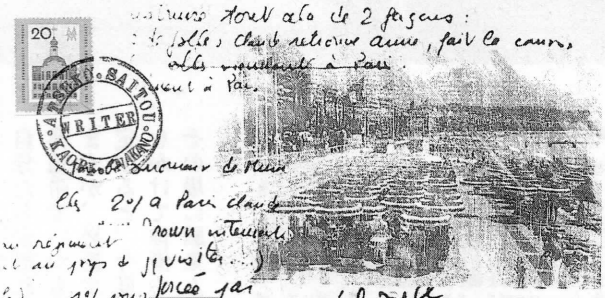
中野香織
㉚紳士道と武士道と映画道の控えめ表現

「サムライ＝インディアンなのよ、野蛮だと思っていたら実はいいところがあったっていうお話で」とか「トム・クルーズの〈おアップちょうだい〉がおかしくってさー」などとキツい敦子節全開なもんだから、ええ、全然期待しないで見に行ったんですよ、「ラスト サムライ」。それがもう、いいじゃないですか！

いやたしかにその前に見てた映画がお友達同士でうだうだしてる内輪ウケ映画で、疎外感を味わわされたってことはあります。だからもう、観客を喜ばせるためにとことんサービスしてくれるってだけでも「ラスト サムライ」があっぱれに見えました。それどころか、妙ちくりんな日本をおとぎ話の国とわりきってしまえば、この映画に流れる時間に身を委ねているのは小さからぬ喜びでしたよ。クルーズのおアップ、いくらでもちょうだいしますぜ！

ま、でも考えてみれば目の肥えた敦子さんが映画を直球でほめるなんてめったにないことですね（美男に関しては珍種を見つけてまでいろんなのを絶賛するけどさ）。で、わたしなりに敦子さんのコメントから映画の出来を推測するコードを作ってみました。

「ラスト サムライ」 12月6日より丸の内ピカデリー1ほか全国松竹・東急系にて



往復連載

齋藤敦子
中野香織
ドーバー越えて

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

カット・井上陽子

「ヴェネチアで一票投じた」……優
「前作よりアクが抜けた感じ」…良の上
「笑えた」……良の中
「まあ、見てみれば？」……良の下
「爆睡しちゃって」……可
「行くの知ってたら止めてた」…不可

だから少なくとも笑えた「ラスト サムライ」は、プロの鑑賞眼から見たら「良の中」あたりかな、と思ってるんですが？

安易にほめちぎらない、むしろあえて過小ぎみに評価するっていう態度は、イギリスの紳士道においては、ご存知のように「アンダーステイトメント（控えめな表現）」っていう美学なんですよね。それによって平然を保つのがいいっていう。なにかと紳士道と比較される武士道において、同じは無理でも近い美学を強いてあげるとすれば……う～ん、「やせがまん」なんかはどうだ？『オクスフォード英語辞典』には「サムライ・ウーマンはたとえ致命傷を負っていても痛みを隠そうとする」なんて用例が出てますが。死ぬほど痛くても平然。天皇の前で涙のおアップしちゃったクルーズには武士道の修行がもう少し必要かも。

敦子さんの過小評価は「アンダーステートメント」とも「やせがまん」ともちょっと違いますね。ただの毒舌……じゃなくて、映画への期待値を低くすることで映画をより楽しく見てもらおうという思いやりでしょう、ええ、きっと。